

## 命題的態度についての消去主義と物理主義的素朴実在論

藤原 諒祐

### 1. 序論：命題的態度についての消去主義

物理主義は、物理学が措定する事物のみが存在するという立場である。したがって、物理主義に立つならば、われわれの心的状態（信念や欲求、意識など）の存在について自然科学の語彙で捉え直すという課題に取り組まなければならない。このようないわゆる心身問題について、心の哲学では心脳同一説や機能主義といった物理主義的な立場がそれぞれの解答を提示している。両者には、心的状態と物的状態が同一であるか、物的状態が心的状態を実現するかと考えるかという違いはあるが、ともに心的状態の実在を認めている。しかし、物理主義に立つからといって、心的状態を実在するものと考えなければならないというわけではない。物理学が描く世界像に心的状態を位置づけるのではなく、心的状態を物理学的世界像から排除するという選択肢も物理主義者には残されているからだ。このラディカルな選択肢をとることで心身問題に対する解答を与えようとする立場が消去主義である。消去主義によると、心的状態についてのわれわれの日常的な理解は根本的に誤ったものであり、それゆえ心的状態は実在しない。

消去主義と呼ばれる立場の中にも、意識についての消去主義や、命題的態度についての消去主義などのバリエーションがあるが、本稿で論じるのは後者の立場である。したがって簡便さのために、以下で“消去主義”というときにはこの立場のことを指すことにする。消去主義が正しければ、信念や欲求といった命題的態度は、悪霊やフロギストンなどと同様実在しないということになる。命題的態度の消去主義はラディカルな立場ではあるが、代表的な消去主義者である P・M・チャーチランドを筆頭に支持者（または部分的な支持者）は存在している（Churchland, 1981, 2007; Ramsey, Stich & Garon, 1991; Bermúdez, 2006; Spencer, 2007）。したがって、命題的態度の実在性を擁護するためには消去を

単なる可能性にすぎないとして片付けるのではなく、チャーチランドらの議論に対して実質的な反論を与えなければならない。

本稿の目的は、消去主義の主張を部分的に認めたくらうで消去主義を論駁すること、そして物理主義的な命題的態度の实在論（物理主義的素朴实在論）の素描を与えることである。消去主義を部分的に認めることで、心脳同一説や機能主義が描くような心的状態と物的状態の関係性の成立を示すことは諦めることになるが、それでもなお物理主義と両立可能なかたちで命題的態度の实在を擁護する道が残っていることを示したい。

本稿の構成は次のようになっている。2 節ではチャーチランドの議論をはじめとする消去主義の議論を再構成することで、消去主義の主張とその論拠の明確化を行う。続く 3 節では消去主義に対する反論を与えることで、命題的態度の实在を擁護する。そして、4 節では命題的態度の实在性の擁護と物理主義が両立可能であることを示し、物理主義的素朴实在論と心脳同一説・機能主義との差異を論ずる。5 節では結論と今後の課題の提示を行う。

## 2. 消去主義の再構成

消去主義の主張を簡潔に述べると以下のようなになる。

- (1) 素朴心理学は経験的な理論である。
- (2) そして、素朴心理学は誤った理論である。
- (3) よって、素朴心理学、そしてその理論的中核をなす命題的態度は消去される。

以下で、この主張の細部と消去主義者が提出する論拠を確認しよう。まず、一つ目の主張、すなわち、素朴心理学が経験的な理論であるという主張についてみていく。素朴心理学（常識心理学、民間心理学などとも呼ばれる）とは、心的状態と行為にかんするわれわれの日常的な理解の枠組みである。例えば、ある人が向こうから来るタクシーに向かって手を挙げているとする。たったこれだけの情報からわれわれは彼女の欲求や信念について、「彼女はタクシーを止めることを欲している」「手を挙げればタクシーが止まると信じている」といった推測を行うことができる。このような推測を可能にするものが素朴心理

学である。素朴心理学には行為と心的状態にかんする言明、例えば、「タクシーを止めることを欲し、手を挙げればタクシーが止まると信じているならば、タクシーの前で手を挙げる」といった言明が含まれている<sup>1</sup>。素朴心理学の言明に含まれる「タクシーを止めたい」という欲求や「手を挙げればタクシーが止まる」という信念は、特定の命題についての志向的な心の状態であり、命題的態度と呼ばれる。素朴心理学による行為や心的状態の説明・予測においてはこの命題的態度が中核を担っており、素朴心理学が誤った理論であることが明らかになれば、命題的態度は消去されることになる。チャーチランドは主張する (Churchland, 1981)。

われわれになじみ深い素朴心理学が経験的な理論であり、科学理論と同様の身分をもつということはわれわれの日常的直観に反するように思われるが、チャーチランドによるとそれが素朴心理学に対する正しい診断なのである。この診断にはいくつかの論拠がある。まず、チャーチランドはわれわれが他者の行動をその心理状態によって予測・説明し、理解する能力をもつことに注目する (Churchland, 1979)。われわれはこの能力により、よく見知った日常的な行動だけでなく、これまで目撃・経験したことのないような行動についても予測や説明が可能となる。われわれが自分自身の体験から得た知識だけで他者の心的状態を理解しているならばこのようなことは不可能である。この事実を説明するためには、外的な行動と内面の心理状態とにかんする抽象的な法則や原理から構成される一定の枠組み、すなわち、理論体系 (=素朴心理学) を共有していると考えなければならない<sup>2</sup>。

さらに、チャーチランドによれば、素朴心理学はその構造において、経験科学の理論体系と類比的である (Churchland, 1970; 1981)。「X は  $\Phi$  を欲したので A した」という説明を考えてみる。この説明が正しいものになるのは、「X が  $\Phi$  を欲している」「X が、この状況下では A をすることが彼に  $\Phi$  をもたらす方法であると信じている」などといった条件が満たされたとき、かつそのときに限る。このような条件文は法則的な性格をもつものとみなすことができる。というのも、この条件文は「すべての X、すべての  $\Phi$ 、すべての A について、もし X が  $\Phi$  を欲し、かつ、X が、この状況下では A をすることが彼に  $\Phi$  をもたらす方法であると信じており、かつ、..., ならば、X は A をする」というよう

なかたちで法則として再記述することができるからだ。また、素朴心理学の表現と物理科学の表現にも類似性を見て取ることができる。物理科学の表現は「…は  $n$  の質量をもつ」「…は  $n$  の速度をもつ」というように変数  $n$  を含む構造になっており、 $n$  に数が入ることで述語が形成される。同様に、素朴心理学の表現は「…は  $p$  を信じている」「…は  $p$  を欲している」といった変数  $p$  を含む構造になっており、 $p$  に命題が入ることで述語が形成される。このような構造により、形成された述語間の関係は変数に含まれる数/命題間の関係となる。さらに、述語に含まれる変数が全称量化によって束縛されることで、様々な法則が形成されることになる。このような構造上の類似性から、素朴心理学は「明白に」経験的な理論であるとチャーチランドは論じる (Churchland, 1981: 70)。

以上の論拠から、素朴心理学が科学理論と同様の身分をもつ経験的な理論であることがいえるならば、過去に消去されてきた理論と同じ運命を素朴心理学もたどるという可能性がでてくる。そしてこの可能性が単なる可能性ではなく、素朴心理学の命運を正しく示唆しているとチャーチランドは考えるのだが、それは素朴心理学が誤った理論であるという第二の主張に基づいている。素朴心理学の理論としての貧困さの指摘はチャーチランド以外の論者からも試みられているので、チャーチランドの主張とともに彼らの主張も簡単に紹介する。まず、チャーチランドによると、素朴心理学は進歩していない退行的なりサーチプログラムである。この点を指摘するためにチャーチランドは素朴心理学の歴史に目を向けるように促す (Churchland, 1981: 74-75)。素朴心理学は、かつては広範な領域の説明に用いられてきた。例えば、風や月は怒りや嫉妬などの感情をもつものとして説明されてきた。しかし、このような領域の説明は科学の発展にともない別の理論に取って代わられるようになった。さらに、現在の限定的な説明領域、すなわち、人間や高等動物の行為と心的状態の説明においても、素朴心理学は 2000~3000 年の間進歩することはなかった。このような素朴心理学の歴史を省みて、素朴心理学は停滞しているとチャーチランドは論じる。

素朴心理学の停滞・後退の歴史だけが素朴心理学の誤りの根拠であるわけではない。チャーチランドによれば、素朴心理学には説明力において脳神経科学や認知科学に劣っているという欠点もある。例えば、三次元視覚イメージの生成や、睡眠などの心理的機能、そして、幼児や動物の学習機能を素朴心理学は

説明できない (Churchland, 1981; 2007) . 一方の脳神経科学や認知科学は発展を続けている科学理論であり, 素朴心理学が説明できない事象に光を当てたり, その説明の可能性を示唆したりすることができている<sup>3</sup>. また, 素朴心理学は単に脳神経科学や認知科学より説明力が劣っているだけでなく, それらの科学理論と説明が食い違うことがあるということがパーミュデッツやスペンサーによって指摘されている (Bermúdez, 2006; Spencer, 2007) . 彼らは錯視を用いた実験において, 意図された行為と実際の行為が異なっているような状況が起こることに注目する. このことは, 意図された行為が実際に行われるという素朴心理学による意図と行為の説明に反する事実である. そして, 脳神経科学はこの事実を説明することができるので, 脳神経科学と素朴心理学では意図と行為についての説明が食い違う.

さらに, 素朴心理学と他の科学理論との親和性の低さという欠点も指摘されている. ラムジーらによると, 認知科学の分野で古典的なモデルに対して現れたコネクショニスト・モデルでは, 命題的態度が役割をもたないことになる. ラムジーらは, 命題的態度を「別の命題的態度の生成において, そして最終的には振る舞いの生成において因果的役割を果たす, 機能的に相互に区別され, 意味論的に解釈可能な状態」 (Ramsey, Stich & Garon, 1991: 97) と定義した上で, そのような状態としての命題的態度がコネクショニスト・モデルには見いだせないと論じる. コネクショニスト・モデルでは相互に結合されたノード (ニューロン) によって入力処理されるため, モデルにおいて命題は分散的に表象される. そして, 個々のニューロンは興奮パターンを変化させて様々な命題の表象を担うことになる. したがって, 各命題は相互に区別された構造によって表象されるわけではなく, 表象を担うニューロンが意味論的な解釈を受けることもない. つまり, コネクショニスト・モデルでは, 命題的態度に対応するような構造は存在しない. よって, ラムジーらによれば, 素朴心理学はコネクショニスト・モデルを認知のモデルとするような認知科学に還元できないことになる.

チャーチランドたちによる以上の議論の妥当性は次章で検討されることになるが, 仮にこれらの議論がすべて正しく, すなわち, 素朴心理学が経験的な理論であり, かつ優れた科学理論に還元できないような誤った理論であるならば,

素朴心理学, そしてその理論的中核をなす命題的態度は消去されるという第三の主張は妥当性を帯びることになる.

### 3. 素朴心理学の擁護

本節の目的は前節で明確化された消去主義に対する反駁である. 前節では消去主義者の三つの主張をみてきたが, これらの主張のうちのどれか一つの妥当性を否定することができれば消去主義の反駁が可能になる. 素朴心理学が経験的な理論であるという第一の主張が正しくなければ, 素朴心理学が過去の科学理論のように消去されるといえなくなる. 素朴心理学が誤った理論であるという第二の主張が正しくなければ, 素朴心理学が消去されるべき理論であるという消去主義者の診断が間違っていることになる. そして, 素朴心理学と命題的態度が消去されるという第三の主張の否定は, 消去主義の否定に他ならない. もちろん実際には, 三つの主張は, 第一の主張と第二の主張が第三の主張を支えるという関係になっているので, 第一の主張と第二の主張のどちらかの誤りが示されれば第三の主張も誤っているということになる. 逆に, 第一の主張と第二の主張の両方が正しいならば, 第三の主張は正しいということになる. したがって, 消去主義への反駁のためには第一の主張と第二の主張のどちらかを否定しなければならない.

本稿では, 第一の主張の妥当性を認め, 第二の主張を否定することで消去主義を反駁するという方針をとる. したがって, 素朴心理学が理論であるということ的前提として議論を進めることになる<sup>4</sup>. なぜこの方針をとるかという点, 第一の主張の否定に対しては, 消去主義者は主張に変形を加えることで応答が可能であると考えられるからだ. 例えば, 素朴心理学が理論ではなく, その目的が予測・説明とは異なる実践だったとしても, 現在の素朴心理学的実践が科学理論の知見に基づくよりよい実践に取って代わられる可能性がある. このような可能性に訴えることで, 消去主義者は第一の主張の否定に応答することができるかもしれない<sup>5</sup>. 以上の理由から本稿では素朴心理学が誤った理論ではないということを主張することで消去主義の反駁を行う.

それでは, 素朴心理学が誤った理論であるという主張への具体的な反論に移

ろう。まず、消去主義者が提出する論拠への応答からはじめたい。チャーチランドは素朴心理学の停滞の歴史を指摘し、素朴心理学が退行的なりサーチプログラムであると主張する。しかし、素朴心理学が説明領域を狭めてきたこと、そして、進歩を見せないことから素朴心理学が誤った理論であるという結論を導くのは性急に過ぎる。前者の事実は、素朴心理学の理論としての貧困さというより、適切な用途を超えて素朴心理学を利用していったという人間の側の過失を示していると考えられるし、後者の事実はそれ自体で素朴心理学の誤りの論拠となるわけではない。したがって、このような事実から理論の是非を決定することはできない。

また、素朴心理学には説明できない事象が消去主義者によっていくつも挙げられているが、これらの事象を説明できないことも素朴心理学の誤りの証左とはなりえない。素朴心理学はある主体のもつ心的状態と行為の連関を予測・説明する理論であり、素朴心理学は自身の予測・説明すべき領域において高い有用性を示している。素朴心理学に三次元視覚イメージや睡眠や学習の機能まで説明させようとすることは過剰な要求であるだろう。さらに、素朴心理学の説明と脳神経科学の説明との食い違いは、二つの理論における動作の個別化のレベルの混同から導かれた誤った結論であると説明できる (Grünbaum, 2012)。素朴心理学的な動作の個別化のレベルでは、意図された行為と実際の行為は同じものということができし、このことは素朴心理学と異なる動作の個別化を行う脳神経科学の理論に抵触しない。

素朴心理学が脳神経科学や認知科学に還元できないという点についても、素朴心理学が十分な経験的長所をもっているならば、還元不可能性からその誤りが導かれることはないと応答することが可能である。したがって、消去主義者が提出する論拠は素朴心理学が誤った理論であると結論づけるには不十分なものである。

次に、素朴心理学が優れた理論であるという議論に移りたい。デネットは素朴心理学が行為の予測・説明において有用性を示すことを論じている (Dennett, 1991)。脳神経科学や認知科学には人間の行為の産出について精緻な「パターン」を捉えることができるという利点があるが、その対価として計算や観測が複雑であるという欠点がある。一方、素朴心理学には、捉えることができるパ

ターンが脳神経科学や認知科学よりも精緻でない、すなわち「ノイズが大きい」という欠点があるが、計算が容易で観測に特別な器具を要しないという利点がある。脳神経科学・認知科学と素朴心理学とのこのような対比から、実践においては素朴心理学が有用性をもっているということがわかる。

また、ホーガンとグラハムは行為者性 (agency) という概念が素朴心理学的な概念であると論じている (Horgan & Graham, 1991)。彼らの分析によると、意図的な行為とは、実行された行為を合理化し、その行為を引き起こすような、命題的態度の保持を伴うような行為である。したがって、命題的態度を措定しないような理論では、意図的な行為 (命題的態度の保持を伴う) と単なる身体の動き (命題的態度の保持を伴わない) を区別することができないということになる<sup>6</sup>。

さらに、デネットは、素朴心理学が脳神経科学・認知科学とは異なる本性をもつということを指摘している (Dennett, 1987)。デネットは事実分析的な理論と規範的な理論とを区別する。事実分析的な理論は事実の記述とそのメカニズムの解明を目的とするのに対し、規範的な理論はどのようなことが起こる／起こされる「べき」かという規範的な問題に取り組むことを目的とする。この分類によれば、脳神経科学・認知科学はわれわれの脳が実際にどのように働くのかを説明する事実分析的な理論であり、素朴心理学は与えられた状況において合理的な存在者がどのような信念や欲求をもつ「べき」か、そして、どのように振る舞う「べき」か、ということにかんする規範的な理論である。したがって、規範的な問題に対して答えることができるという脳神経科学・認知科学にはない利点が素朴心理学にはあるということになる。以上から、素朴心理学には実践上の有用性、行為者性という概念の把握、規範的問題への関心という長所があり、誤った理論として消去することの代償はかなり大きいといえる。

以上のような素朴心理学の長所を示す議論にかんしては、消去主義者からの応答が試みられている。チャーチランドは、脳神経科学・認知的科学的な語彙や理解の仕方がわれわれの日常実践に根付くことで、これらの理論を容易に用いることができるようになるということ (Churchland, 1995) や、行為者性や合理性といった概念が脳神経科学や認知科学においていずれ理解可能になるということ (Churchland, 1981) を主張している。しかし、それらは未だ可能性に過ぎ

ない。少なくとも現時点においては素朴心理学には脳神経科学・認知科学と同等の、あるいは、それらの理論とは異なる実践的有用性が認められる。したがって、チャーチランドによるこれらの応答は消去主義の擁護として不十分であるといえる。

本節で行われた命題的態度の实在性の擁護を簡潔にまとめよう。まず、本節では、素朴心理学が一種の経験的理論であるという消去主義者の主張を認めた。その上で、素朴心理学は実践的な有用性をもつ理論であるということを示し、素朴心理学が指定する命題的態度は实在するということを論じた。このような議論によって命題的態度の实在性を擁護する立場を本稿では素朴实在論と呼ぶことにする。

#### 4. 物理主義的素朴实在論

前節の議論では、命題的態度がいかなる存在者であるかについては論じなかった。そのため信念や欲求をもつという心的状態が物理的な状態とどのような関係にあるかという問題にはまだ解答が与えられていない。本節では、素朴实在論が物理主義と両立可能であるということ論じ、心身問題に対する解答の素描を提示したい。

代表的な物理主義の立場である心脳同一説と機能主義は命題的態度のような存在者が科学的心理学（脳神経科学や認知科学）の存在カテゴリーに含まれること、すなわち、素朴心理学が科学的心理学に還元されることを含意する。心脳同一説では命題的態度は特定の脳状態と同一とされ、機能主義では命題的態度は脳によって実現される機能的状態とされる。したがって、心脳同一説では命題的態度は脳神経科学の存在カテゴリーに、機能主義では認知科学の存在カテゴリーに含まれることになり、このことが命題的態度の实在性を担保する<sup>7</sup>。一方、素朴实在論では命題的態度の实在性を担保するものは素朴心理学の有用性であり、素朴心理学が科学的心理学に還元されることを必要としない。ラムジーらは命題的態度が認知科学において役割をもたないという可能性を論じたが、素朴实在論はこの可能性を認める。心脳同一説・機能主義と素朴实在論との以上のような相違を考えると、素朴实在論は非物理主義的な立場であるとい

う疑いがでてくるかもしれない。しかしこの疑いは妥当なものではないということ以下で論じていく。

まず、素朴实在論が命題的態度の实在以外に何を含意するのかみていく。この考察により素朴实在論と命題的態度の实在を認める他の物理主義的立場との差異がさらにはっきりと示されるだろう。素朴心理学の有用性から命題的態度の实在性を主張する素朴实在論では、信念・欲求の帰属により行為の予測・説明が可能な主体は、信念・欲求を実際にもっているということが主張される。この主張によれば、人間以外の主体も信念や欲求をもつことになる。なぜならば、信念・欲求の帰属により行為の予測・説明が可能な主体は人間に限られないからだ。例えば、人間以外の高等動物や、コンピュータ・プログラム (Dennett, 1991)、企業や団体 (Knobe & Prinz, 2007) は信念や欲求を帰属することでその行為 (あるいは行動) を予測・説明できるだろう。動物の行動を信念や欲求によって説明することは日常的に行われているだろうし、コンピュータ・プログラムや企業などの集団が次にどのように動くかをそれらがもつ知識 (信念の一形態) から予測することは可能だろう。したがって、素朴实在論に立てば信念や欲求は人間の脳状態に限らず、動物の脳状態やプログラム、集団における何らかのプロセスによっても実現されることになる。このことから、素朴实在論では、命題的態度を特定のタイプの脳状態と同一のものとして記述することはできない。すなわち、心脳同一説と同様の考え方で命題的態度の存在を物理的状态 (脳状態) と関係づけることは素朴实在論にはできないことになる。

また、機能主義者が主張するように命題的態度を認知科学の措定物とみなすことが素朴实在論に可能かどうかとも疑わしい。上述のように、素朴实在論では人間以外の主体 (コンピュータ・プログラム、集団) も信念や欲求をもつことになる。そして、コンピュータ・プログラムや集団における信念・欲求の処理・生成メカニズムが人間におけるメカニズムと同じあるいは類似的であるかどうかには議論の余地がある。したがって、信念・欲求が通常の (人間の認知を対象とする) 認知科学の存在カテゴリーに含まれるという主張は素朴实在論の立場から考えると難しいだろう。

以上から、素朴实在論を認めると命題的態度が脳神経科学や認知科学の存在カテゴリーに含まれるという主張が困難になる。それでは素朴实在論と物理主

義をいかにして調停することができるだろうか。この問題に対しては前述のラムジーらの議論とそれに対するハイルの応答が解決のヒントを与えてくれるだろう。ラムジーらの議論を振り返ると、認知科学におけるコネクショニスト・モデルでは、命題的態度に対応する構造は存在しないことになる。もちろん認知のモデルとしてコネクショニスト・モデルはふさわしくない、あるいは、このモデルだけでは不十分であることを示すことができれば命題的態度の存在が認知科学においても措定されるという可能性を擁護することができる。しかし、ここでは認知のモデルとして何が適切かという議論には立ち入らず、ラムジーらの議論の大部分を受け入れつつ命題的態度を物理主義的に捉えられることを示したい。

コネクショニスト・モデルにおいて命題的態度に対応する構造が存在しないという議論の前提として、命題的態度がいかなる状態であるとされていたかを振り返ってみる。ラムジーらは、命題的態度を「別の命題的態度の生成において、そして最終的には振る舞いの生成において因果的役割を果たす、機能的に相互に区別され、意味論的に解釈可能な状態」とした上で議論を進めている。しかし命題的態度に対するこのような分析に問題がある可能性をラムジーらは見落としている。ハイルは命題的態度の存在にかんして、命題的態度に対応するような相互に区別される構造物の存在を前提とする必要はないと論じる(Heil, 1991)。コネクショニスト・モデルの一例として、特定の入力(命題)に対して特定の出力(真理値)を返すような人工的なネットワークを考えてみる。このネットワークは複数の入力を処理することができるのだが、その際にネットワークにおける特定のノード(ニューロン)が特定の入力に特異的な働きをするのではなく、すべての入力の処理においてすべてのニューロンが何らかの役割を果たしている。したがって、ネットワークにおける各ニューロンは機能的に相互に区別されるような構造物でない。しかし、このことからこのネットワークにおいて命題的態度が存在しないと結論づけることはできない。なぜなら、このネットワークは特定の命題(例えば「犬は毛皮をもつ」「猫は毛皮をもたない」)に対して特定の出力(true, false)を返すものであるので、このネットワーク全体によっていくつかの命題的態度(「犬は毛皮をもつ」という信念、「猫は毛皮をもたない」という信念)が表現されていると考えられるからだ。し

たがって、ネットワークにおける各構造物が命題的態度に対応するとみなすことができなくとも、ネットワーク全体が命題的態度に対応するとみなすことができる。

ハイルのこのような議論は素朴实在論と親和性が高い。素朴实在論では、ある主体の行為や心的状態を命題的態度の帰属によって予測・説明することが有用であるならばその主体は実際にその命題的態度をもっているということになるが、このとき、命題的態度が相互に区別されるような構造物と対応するかどうかは問題にならない。したがって、素朴实在論者はラムジーらによる命題的態度の分析を退け、ハイルの議論のようなかたちでコネクショニスト・モデルにおける命題的態度の存在を主張することができる。

この点について、ネットワーク全体によって命題的態度が表現されているからといって必ずしも認知科学において命題的態度の存在が措定されるわけではないということに注意したい。いくつかの化学物質の組み合わせと化学的なプロセスはある一匹の犬を表現できるが、このことは化学の存在カテゴリーに犬という存在者が含まれるということを含意しないだろう。同様に認知科学の存在カテゴリーに命題的態度という存在者が含まれないという可能性は依然として残っている。とはいえこのことは素朴实在論にとって問題とはならない。なぜならば、素朴实在論にとって特定の科学理論の存在カテゴリーに含まれることは命題的態度の实在性には重要ではないからだ。

以上の議論から素朴实在論と物理主義の両立にかんしていかなる洞察を引き出すことができるだろうか。素朴实在論に立つと、命題的態度を特定の脳状態と同一視することはできなくなる。また、命題的態度が認知科学の存在カテゴリーに含まれない可能性を認めることにもなる。したがって、素朴实在論は心脳同一説あるいは機能主義と同じように命題的態度と物理的な状態との関係性を考えることはできない。しかし、このことから素朴实在論が物理主義と両立不可能であると結論づけられることはない。なぜなら、物理的状态が確定すればどのような命題的態度をもっているかは確定する、すなわち、命題的態度は物理的状态にスーパーヴィーンするというかたちで素朴实在論と物理主義を両立させることは可能だからだ。この観点からすれば、ハイルの議論は命題的態度が物理的状态にスーパーヴィーンする一つのあり方を示していると捉えるこ

とができる。人工ニューラルネットワークは命題的態度を表現しているが、ネットワークにはノードと各ノードの連結以外の特別な存在者は必要ない。したがって、ノードと連結と特定の入力を実現するような物理的状态が確定すれば、命題的態度が確定するということになる。したがって、命題的態度が存在するために非物理的状态は必要ないことになる。このようなかたちで物理主義と素朴实在論は両立可能である<sup>8</sup>。命題的態度が物理的状态にスーパーヴィーンすると主張することで物理主義にコミットする素朴实在論を単なる素朴实在論と区別して物理主義的素朴实在論と呼ぶことにしよう。

物理主義的素朴实在論と他の物理主義的な立場である心脳同一説や機能主義との相違を簡潔にまとめると以下のようなになるだろう。まず、命題的態度にかんして、心脳同一説は特定の脳状態と同一のものであると考えるが、機能主義と物理主義的素朴实在論はともに何らかの物理的状态によって実現されるものであると考える。また、機能主義は複数の物理的状态によって特定の認知的状態が実現される可能性を認めるが、物理主義的素朴实在論はこの可能性に加え複数の認知的状態によって特定の命題的態度が実現される可能性を認める<sup>9</sup>。次に、素朴心理学の科学理論への還元可能性については、心脳同一説は脳神経科学に、機能主義は認知科学に還元可能と考える一方で、物理主義的素朴实在論は素朴心理学が特定の科学理論に還元できない可能性を認める。このような相違点から、物理主義的素朴实在論は心脳同一説・機能主義とは異なった立場であることがわかるだろう。

## 5. 結論

消去主義者は、素朴心理学が誤った理論であるためにその理論的中核をなす命題的態度とともに消去されると主張する。しかし、命題的態度の実在性がこのように素朴心理学の経験的長所に依存するのであれば、素朴心理学の有用性に訴えてその実在性を主張できる。本稿ではこのようなかたちで命題的態度の実在性を擁護する立場を素朴实在論と呼んだ。素朴实在論は、命題的態度の存在が物理的状态にスーパーヴィーンすると主張することで物理主義と両立することができる。物理主義と素朴实在論の組み合わせ、すなわち物理主義的素朴

実在論は心脳同一説，機能主義，消去主義とは異なる物理主義的立場である。

以上が本稿の結論である。最後に物理主義的素朴実在論の今後の課題を示そう。物理主義的素朴実在論は命題的態度が物理的状态にスーパーヴィーンすると主張するが，この主張だけでは命題的態度と物理的状态との関係性が不明確である。また，物理主義的素朴実在論はコネクショニスト・モデルで表されるような状態（特定の脳状態）以外の物理的状态にも命題的態度がスーパーヴィーンすることを認める。したがって，命題的態度が物理的状态にスーパーヴィーンするそれぞれのケースについてより詳細な検討が必要になるだろう。例えば記号計算を行うチェス・プログラムや，討議による意思決定を行う集団が命題的態度をもつということについて，コネクショニスト・モデルとは別に説明を与える必要があるかもしれない。また，異なる物理的状态にスーパーヴィーンする命題的態度をいかに個別化するかという問題も検討する必要がある。これらの問題に取り組むに当たっては，われわれの信念・欲求帰属の実践にかんする様々なデータとそのメカニズムの解明が助けとなると思われる。このような検討を重ねることで，本稿で素描された物理主義的素朴実在論により深い実実を与えることができるだろう。

## 註

1. 素朴心理学を言明の集合であるとする捉え方は，理論の文集合モデルという素朴心理学的なモデルに依拠している。したがって，消去主義が正しければ素朴心理学は言明の集合ではないということになる。とはいえ，理論の本性がいかなるものであれ，そのことが消去主義の論拠あるいは反証となることはないので，さしあたり理論の文集合モデルを前提としておく。文集合モデルの対案としてチャーチランドが提出する高次元ベクトル活性空間モデルについては Churchland, 2012 を参照。
2. Churchland, 1979 では，このような理論（すなわち素朴心理学）のことを P 理論と呼称している。
3. 認知科学が様々な事象について説明を与えることは，Churchland, 1995 において具体的に論じられている。
4. この点にかんしてはさらなる議論が必要であると考えているが，本稿では深入りしない。しかし，以下で示される物理主義的素朴実在論は，軽微な修正を加えれば，素朴心理学が経験的理論でないという主張とも両立可能である。
5. 消去主義者によるこのような応答の可能性については，金杉, 2004 を参照。
6. 脳神経科学や認知科学が命題的態度を措定するかどうかについては意見が分かれる。消去主義者はこれらの科学理論は命題的態度を措定しない／措定するべきではないと

論じるが、同一論者と機能主義者はそれらの理論（のどちらか）において命題的態度が指定されると論じる。前者が正しければ、素朴心理学には行為者性を捉えることができるという科学的心理学にはない利点があることになり、後者が正しければ、命題的態度は消去されないということになる。したがって、いずれにせよ消去主義者にとって不利な結論が導かれることになる。

7. ここでは「心脳同一説」はタイプ同一説、すなわち、特定のタイプの心的状態と特定のタイプの脳状態を同一のものとする立場を指している。心的状態と脳状態のトークン間の同一性のみを主張するような同一説（トークン同一説）においては命題的態度が脳神経科学の存在カテゴリーに含まれることは含意されない。
8. もちろん命題的態度が物理的状态にスーパーヴィーンするあり方が複数ありうるということには留意したい。例えば、命題的態度に対応するような構造物が機能的に相互に区別されるようなかたちで表象されるようなモデルでは、コネクショニスト・モデルの場合とは異なるかたちで命題的態度が物理的状态にスーパーヴィーンすることになる。
9. 註 8 を参照。

### 参考文献

- Bermúdez, J. L. (2006). “Arguing for Eliminativism,” in *Paul Churchland: Contemporary Philosophy in Focus*, Brian L. Keeley (ed.), Cambridge University Press, pp. 32-66.
- Churchland, P. M. (1970). “The Logical Character of action explaining,” *Philosophical Review*, 79, pp. 214-236.
- (1979). *Scientific Realism and the Plasticity of Mind*, Cambridge University Press (村上陽一郎, 信原幸弘, 小林傳司訳, 1986 年, 『心の可塑性と実在論』, 紀伊国屋書店).
- (1981). “Eliminative Materialism and the Propositional Attitudes,” *The Journal of Philosophy*, 78, pp. 67-90.
- (1995). *The Engine of Reason, the Seat of the Soul: a Philosophical Journey into the Brain*, MIT Press (信原幸弘, 宮原昭二訳, 1997 年, 『認知哲学—脳科学から心の哲学へ』, 産業図書).
- (2007). “The Evolving Fortunes of Eliminative Materialism,” in *Contemporary Debates in Philosophy of Mind*, Brian P. McLaughlin and Jonathan Cohen (eds.), Blackwell Publishing, pp. 160-181.
- (2012). *Plato’s Camera: How the Physical Brain Captures a Landscape of*

*Abstract Universals*, MIT Press.

Dennett, D. C. (1987). *The Intentional Stance*, MIT Press.

———(1991). “Real Pattern,” *The Journal of Philosophy*, 88, pp. 27-51.

Grünbaum, T. (2012). “Commonsense Psychology, Dual Visual Streams, and the Individuation of Action,” *Philosophical Psychology*, 25, pp. 25-47.

Heil, J. (1991). “Being Indiscrete,” in *The Future of Folk Psychology: Intentionality and Cognitive Science*, John D. Greenwood (ed.), Cambridge University Press, pp. 135-148.

Horgan, T., and Graham, G. (1991). “In Defense of Southern Fundamentalism,” *Philosophical Studies*, 62, pp. 107-134.

金杉武司 (2004) 「フオークサイロロジーと消去主義」信原幸弘 (編) 『シリーズ心の哲学 I 人間篇』勁草書房, 179-220 頁.

Knobe, J., and Prinz, J. (2007). “Intuitions about Consciousness: Experimental Studies,” *Phenomenology and the Cognitive Sciences*, 7, pp. 67-83.

Ramsey, W., Stich, S., and Garon, J. (1991). “Connectionism, Eliminativism, and the Future of Folk Psychology,” in *The Future of Folk Psychology: Intentionality and Cognitive Science*, John D. Greenwood (ed.), Cambridge University Press, pp. 93-119.

Spencer, C. (2007). “Unconscious Vision and the Platitudes of Folk Psychology,” *Philosophical Psychology*, 20, pp. 309-327.